宮古圏域の「著書・論考」をたずねて　第四部　人…

仲宗根　將二

1．山下邦雄『敬神家　国仲寛徒翁小伝』

国仲寛徒は号竹雅、一八七三(明治六)年四月、現在の伊良部・佐和田生れ。一八九六年三月沖縄師範をでて平良小で教職につき、一年後母校伊良部小に移り、五年後二十八歳で校長、佐良浜小校長をへて、一九〇八(明治四十一)年四月、沖縄県特別町村制が施行されたとき、初代伊良部村長に任命された。以後通算十六年村長職にあって、伊良部町の基礎をきづいたことで知られている。村政はもとより、農事の改良普及、有畜農業の奨励、カツオ漁船の導入など産業全般にわたって尽力している。一九二九(昭和四)年八月、在職中病没した。一九三三年五月長男山下邦雄によって『敬神家　国仲寛徒翁小伝』(非売品)が刊行され、さらに翌一九三四年二月、有志によって当時の村役場近く「頌徳碑」が建立された。碑銘・碑文ともに生前親交のあった元沖縄警備隊区司令官「梅田岩樹陸軍少将」が記している。伊良部町は一九九三(平成五)年一月、町制施行十周年を記念して、「老朽」化した「頌徳碑」を町役場前庭に新たに建立、さらに遺族の同意を得て、B六判・六八頁の『小伝』をB五判に大型化し六十年振りに復刻、刊行したものである。復刻にさいして、川満昭吉伊良部町長が「発行にあたって」で、「初代村長・国仲寛徒氏の偉業を後世に残す資料」として刊行したと記している。口絵には新旧二つの「頌徳碑」の写真を掲載、寛徒の略歴と功績を紹介している。本文は、関係者による追悼文、書信及談話、遺族の「亡き父を語る」、生涯と其人物、余禄で編集されている。追悼文を記したのは次の十二人である。

国仲村長をおもふ・陸軍中将佐多武彦、竹雅氏を偲びて・陸軍少将梅田岩樹、国仲寛徒君を憶ふ・新竹州知事内海忠司、国仲村長の追想・東京区会議員丹親欣、国仲寛徒先生の憶ひ出・元小学校長比嘉春潮、国仲竹雅先生を懐ふ・同山内朝用、国仲寛徒兄を憶ふ・同比嘉重徳、宮古で忘れ得ぬ事ども・群馬裁判所判事奥野彦六郎、国語科の秀才国仲寛徒君を語る・級友元校長桃原良明、故国仲寛徒先生を追憶す・新里小学校長本永玄位、故伊良部村長国仲寛徒氏を憶ふ・県会議員柴田米三、皇道遵奉の敬神家(談)故男師校長保田銓次郎。

追悼文を寄せた十二人のうち二人は、陸軍の将官であり、寛徒が「神皇正統記」や「古道大意」「古訓古事記」「古神道大義」等を精読して神道に通じ、「軍人精神其ものの如き性格」(「生涯と其人物」より)ともかかわるものであろう。併せて比嘉春潮、比嘉重徳、奥野彦六郎ら三人は沖縄歴史の研究者としても著名であり、ロシア人で日本ひいては東洋研究者で知られるニコライ・ネフスキーとの交わりや遺稿「人倫に関する宮古方言(『方言』二―四・一九三一年「沖縄文化論叢」3民俗編Ⅱ収録)も生まれるべくして生まれた寛徒の資質を示しているといえよう。

『小伝』の著者山下邦雄は旧名国仲寛栗で、寛徒の長男である。一八九七(明治三十)年生。沖縄中学から師範二部、神宮皇学館専科をでて伊良部小、佐良浜小をへて県立農林学校へ移り、国漢を教える。志布志中学(鹿児島県)に転じたあと、さらに日大高師科をへて学部を卒業している。『平良市史』第八巻資料編6「人物」編によると、その

後の寛栗は鹿児島、福島、神奈川各県で中等学校に勤務、戦後は横須賀高校長で定年、一九七一年死去している（執筆・大井浩太郎）。編集後記によると、鹿児島県在職中に編集をはじめ、福島県にあって発行したようである。なお次男寛長は宮古地区医師会「医療資料」によると、一八九三（明治三十六）年生。県立二中から台北医専に入り、在学中に海軍委託生となり、卒業後は軍医少佐まで進み、戦後は警察庁に勤務、科学捜査研究所初代法医室長をつとめている。退官後は東京都渋谷区で国仲医院を開業、一九八〇年三月二十三日死去している。

（「宮古郷土史研究会会報」一一一号、一九九九・二・一二）

2．『チャム家の主～町医者・友利正雄を偲んで』

上野・宮国出身で、永年平良・西里で町医者として慕われた故友利正雄医師が「食道癌」で死去したのは、一九九一年十月十五日である。六十九歳であった。七回忌を迎えるにあたり、宮川耀子さん、友利直樹氏ら遺族によって、このほど『チャム家の主～町医者・友利正雄を偲んで』が出版された。

「はじめに」は、友利医師は「生前、自分の生い立ちから生きてきた軌跡を書き記したいと切望していた」が、果たせずに逝ってしまったので、代ってその思いが「兄弟の記憶の糸をたぐり寄せ、少しでも実像を浮かびあがらせたいと願つ」てのことであると記している。友利医師は自分史をまとめたいと思っていたにしては、記録は「皆無に等しい」という。本人も周囲もこんなに早く逝くとは思いもよらず、引退してから手がけようと考えていたのだろう。

本書は、「闘いと安らぎの狭間で」「輝きの日々」「ともに歩いた季節」「道程」以上四編で構成されている。「闘いと安らぎの狭間で」は、五女の耀子さん（歯科医師）が、「アマリリスの咲いた庭」、長男の直樹氏（医師）が「癌在宅医療の日々」の題で、父・友利医師の人間ドック、精密検査、入院、手術、退院、治療、逝去、に至る、一年近い壮絶な明けくれを、その症状とともに日を追うて克明に記している。「くれぐれも延命処置はしないでくれ」と「何度も何度も」言ったという。激痛に耐える父親を見守る、悲しみを押さえた、親と子の、家族一体となっての奮闘記である。

「輝きの日々」では、俳優佐藤蛾次郎との一九八八年の対談「地域に溶け込んだ医療の道を歩き続ける」、照屋寛善琉球衛生研究所長の『戦後沖縄の医療』に収録された、友利医師もかかわる「宮古のソテツ中毒調査報告書から」等がおさめられている。「ともに歩いた季節」は、息子や娘、孫たちの想い出の記、「道程」は、友利医師の略歴と母校台北帝大附属医学専門学校同窓生名簿である。

「まったく父を知らない孫たちを含め、近しい人たちの記憶にとどめる」ための私家版である。本来そっとしておくべきなのかもしれないが、編者の耀子さんの夫宮川耕次君が旧平良市役所時代の同僚であり、郷土史研究会員であるところから、あえて紹介させてもらった。お許しを乞う。

（「宮古郷土史研究会会報」一〇六号、一九九八・二・一六）

3．下地國雄『馬持郎一代記～下地次郎米寿記念』

八月八日は方言でいう「カリー」な日である。米の字を分解すれば「八・十・八」になるというので、八十八歳の高齢者を「米寿」と称し、古くからこの日に祝いがもたれている。人生五十年といわれた時代に、七十歳は「古稀」と祝われた。まして八十八歳の長寿を祝う米寿は、近隣はおろか、はるか遠方からもあやかりたいもの、と祝いにかけつけたという。高齢化社会とはいえほとんどの男性にとっては、

八十八歳は今も高嶺の花であろう。健康な長寿にあやかりたいと思うのは、昔も今も変わりない。まして子や孫、身内にとっては何よりも嬉しいことであろう。

著者はこうした思いを一年余りもあたため、父「馬車持ちゃ次郎」の八十八歳の長寿を記念して、八月八日出版した。題して「馬持郎一代記」である。「馬持郎（めじろ）」とは、「馬車持（む）ちゃ次郎」の愛称である。大戦で灰尽に帰した平良のまちの復興期、一九五三年ごろからというから四十六年前、著者の父次郎は平良港を拠点に馬車運送業をはじめた。生来のまじめな性格から隣り近所、同業者はじめ、商店街の人びとからも信頼され、頼りにされた。そこから誰れいうともなく「馬車持（む）ちゃ次郎」とよばれるようになった。著者はこのように、序文で、父次郎について敬愛の念をこめて記している。

巻頭では父次郎と母モウシ（故人）の連れだった古稀祝いの写真にはじまって、子・孫ら全員の多彩な写真一〇七枚、二十四頁にわたって収録している。

本文は、幼・少年・伝馬ガク時代、太平洋戦争と下地家、仲仕時代、豆台風と次郎の第六感、馬車持（む）ちゃ時代、馬車持（む）ちゃ引退、モウシの死、ゲートボール時代、次郎の生まれ育った地域、下地家の崇拝する御嶽、新聞に見る下地次郎ファミリー、と大きく十一項目を立て、それぞれいくつかの小項目で記述している。このあとに、「馬持郎年譜（下地家の歴史）」が付されている。巻末に『平良市史』など多くの参考文献も記されているが、これらの徹底した読みくだしとともに、さらに詳細な聞き取り調査を反映した年表になっている。父次郎の祖父武利の生まれた天保十三（一八四二）年から、本年五月、三男の初孫、つまり曾孫の生まれるまで、次郎ゆかりの、おそらくすべての人の冠婚葬祭をふくむ動向が示されるとともに、百数十年にわたる宮古近代史の略年表になっている。

本書は著者の企画と調査、執筆はもとよりだが、姉、弟、妹ら父次郎の四男五女、そしてその配偶者、子、孫らの協力を得た苦労の成果といえよう。B四判、一六八頁、一九九九・八・八刊、私家版。

（「宮古郷土史研究会会報」一一四号、一九九九・九・一〇）

4．下地康夫『巡査ひとすじ～父下地恵幸の生涯』

表題どおり警察官ひとすじに三十八年、退職後わずか二年、六十二年の生涯を終えた父恵幸氏について、三十三回忌の節目にまとめたという。父を語る、系図、年表、表彰状等の四分野からなる。

「父を語る」は、息子としてかねて傍近くみていた父の姿、折りにふれ母が語り聞かせてきた父の生き方に加えて、履歴書等をもとに六十二年の生涯を哀惜の思いをこめて記している。恵幸は、日露戦争直後の一九〇六（明治三九）年十二月、平良・下里で父白川氏後裔、母宮金氏後裔の家柄に生まれている。平良尋常高等小学校を卒えて青年訓練所（のちの青年学校）に通い、一九二七（昭和二）年、満二十歳になって兵役（都城歩兵二十三連隊）についている。二か年の兵役中、模範兵であったのであろう。特別射撃大会・銃剣術競技大会等で活躍、精勤賞、善行証書等を授与され、上等兵まで昇進している。

一九二九年除隊、帰郷して結婚したが、世はあげて世界大恐慌時代、なかなか定職にはつけない。平良町青年訓練所指導員、同林業臨時雇いなどをへて、一九三〇年には台湾へ渡って生涯の職となる警察官になっている。この年、台湾では日本の植民地統治三十五年、圧制に対する現地住民の反発は遂に暴発、世にいう「霧社事件」をひきおこしていた。十月二十七日運動会で賑わう霧社小学校が襲撃され、児童をふくむ一三四人が殺害された。すぐさま一千余の軍隊、警官隊が鎮圧

にでて、二か月余の戦闘で、現地住民の死者三〇〇余、自殺者三〇〇余、他に多くの行方不明者をだした。この事件で犠牲になった警察官の不足を補うための募集を知らされての渡台、応募であったという。

一九四五年八月、日本の敗戦で引き揚げるさい、多くの日本人、とりわけ警察官一家は現地の人びとから手ひどい報復をうけた事例が聞かれるが、著者の一家はよほど地域になじんでいたのであろう、「別れを惜しんで」「米俵(七斗)を銭別として」届けた人もいたという。一九四六年三月帰郷、同年十月宮古警察署巡査となり、一九六三年、六十歳退職まで一巡査で終わっている。「後書き」で「父に何もしてあげない中に野辺送りをしましたが、せめてこの記念誌が供養になればと念じています」と記している。位牌と除籍簿、聞き取り等による父方、母方の手づくり「系図」「年表」もふくめて、激動の時代を誠実に生きた(る)父と子の記録である。B五判、五四頁、私家版、二〇〇一・三・五刊。

（「宮古郷土史研究会会報」一二五号、二〇〇一・七・一二）

5．真喜屋恵義『原郷～まほろば』

著者は宮古製糖の創業者であり、沖縄宮古商工会議所の草創期に関わった実業家である。二〇〇二年十一月三十日、享年八十七歳で永眠した。本書はその生涯を平良敏氏が直接聞き取り、まとめたものである。

創立間もない県立宮古中学校(二期)、台北農専、台北帝大(製糖化学)から大日本製糖での研究者への道を戦争で中断された。戦後も官界から糖業中心に地下水開発、畑地かんがい、観光……と、宮古の発展を企画・実践し、晩年は郷土芸能などの文化振興一筋に生きた。その八十余年の、宮古へのこだわりの証であるとともに宮古の未来を語る遺書ともいえる体裁である。残された時間をいとおしみつつ、己れの自他ともに許すであろう波乱のあゆみを語りつつ、区切りのいいところでひと休みして、さらに……、との感を抱かせる。

「はじめに　わが命　故郷に捧げます」で、死の二週間前の十一月十七日午前十時三十六分に病床で語り始めたことを記したうえで、生い立ちからの生涯を三百頁にわたって語っている。運命、青雲、軍人、復興、昇竜、岐路、胎動、開発、原石、未来、とつづく叙述である。ついで「あとがきに代えて　宮古にわが夢を残す」で、同日午前十一時十一分語り終えたことを明示している。

生まれも育ちも、初心を中断させたはずの六年にわたる軍役もふくめて、前半生は宮古では稀にみる順風満帆の境遇にあったといえる。絶頂期の一九七二年に、己れがもっとも大切にしてきたはずの人びとから背を向けられる。それを機に社長を退任し宮古を離れることで、かえって宮古への思いをいっそう強め、多くの郷友の賛同のもと、郷土に材をとった創作劇・舞踊などの文化活動に奔走する。余生を故郷に捧げる多彩な文化活動の始まりである。それを支えた家族や郷友の労を多としたい。

戦後宮古の歴史を語るうえで、重要な一頁を占める宮古・伊良部・宮多三製糖会社合併反対運動にともなう農民弾圧事件や下地島ジェットパイロット訓練飛行場建設をめぐる抗争、本土復帰前後の県外大企業による土地の大量買占め等については、見解を異にする人もいよう。ともあれ宮古の生んだひとりのエリートの波乱にみちたあゆみをとおして、宮古の戦後史を考える一書といえる。平良敏氏の前著『誇りへの太平山回帰』(二〇〇〇・八・二九、みえばし印刷出版部)と併読すればなお理解が深まることであろう。A五判、三〇四頁、私家版。

（「宮古郷土史研究会会報」一三八号、二〇〇三・九・五）

6．平良敏『誇りへの太平山回帰』

近代宮古の経済の担い手はすべて県(郡)外出身者で、一般に「寄留商人」とよばれた。平良の市街地の中心をなす市場通り、西里通り、下里通りもこれら寄留商人によって形づくられたといっても過言ではない。当時扱われた商品はおもに宮古の三大特産品といわれた宮古上布、黒砂糖、カツオ節で、これに牛馬を中心とする畜産をくわえることができよう。一九三〇年代には県内多額納税番付で二位、三位を占める商人もいた。しかし第二次大戦の敗戦で一変する。県外出身者のほとんどが戦時疎開のまま帰らないこともあって、商経済の担い手は地元出身者に移り、また市場の変動で経済活動も変化していく。本書はこうした近代宮古の商経済の後をうけた、戦後宮古経済の推移を跡づけたものだが、その一つひとつに元宮古製糖社長、元宮古商工会議所会頭の真喜屋恵義氏が大きくかかわっていて、「真喜屋恵義略伝」の感をそそるが、それでも「戦後宮古経済史」といってさしつかえなかろう。一九九四年初めから翌九五年春にかけて『宮古新報』に連載したものに加除、訂正した(あとがき)ものだという。著者は「宮古新報」記者である。

七章構成で、そのどれもが戦後宮古経済の重要な節目をなす事業・事件と密接にかかわっている。第一章「宮古製糖」の誕生～新しい鼓動と甘い香りに包まれて―は、戦前以来の基幹作物サトウキビをもとに、小集落ごとに乱立した小型黒砂糖工場の整理統合を条件にした宮古製糖の設立、第二章川の下にはない地下水～水の豊富な島は必ず発展する―は、ハワイから専門技師を招いて、現在の地下ダム構想の基をなす地下水調査、第三章農民暴動と弾圧の中で～共存共栄から浮上する合併の道―は、一九六五年七月、宮古全域を一社独占に直結しかねない宮古、伊良部、宮多三製糖会社の合併にともなう「農民弾圧」事件、第四章大空にかける「下地島空港」～進取の気風が起こる〝よすが〟に―は、軍事基地化のおそれありと、屋良革新県政をゆさぶり賛否激しく対立して規模縮小で成立した経緯、第五章農家の意識改革～先導農場を見たら考えが変わる―は、相つぐ大型台風、長期かんばつによる農業離れ、過疎化対策のサトウキビの品種改良、畑地灌漑の導入、第六章観光リゾート地形成～ダイヤに成り得る原石・平坦な島―は、観光を産業として位置づけ、ホテル事業の導入、第七章先島で始まった公共放送～宮古・八重山と共に歩く四年半―は、宮古・八重山でもテレビを見たいと佐藤総理に請願して実現したＯＨＫ(沖縄放送協会)の設立、といずれも現在の宮古経済に直結する重要な出来事であり、真喜屋恵義氏がつねにその渦中で重要な位置を占めていたことが丹念に追跡されている。真喜屋氏のあゆみを通して戦後宮吉経済を跡づけたともいえよう。

いくつか気になる事もないわけではない。そのひとつをあげると、一九六五年七月二十四日、三社合併のための株主総会にともなう「暴動」のなかで、真喜屋は「合併をしない云々については、一切口にしていない」(一一八頁)とあるが、真喜屋社長は当日空路上覇、翌二十五日松岡行政主席らに報告するなかで、「合併決議の株主総会を決行するのは事態を悪化させるとみて合併中止を宣言」したと語った(七・二六「沖縄タイムス」)と報道されている。またこの事件」は二審高裁で「騒じょう罪」は成立せずとして被告全員が無罪判決されており、裁判所は全沖農による「農民暴動」はなかったと認定していることは本書も記している(一三三頁)とおりである。本年は同「事件」から満三五年の節目である。

(「宮古郷土史研究会会報」一二二号、二〇〇一・一・一二)

〈付記〉第三部第10項「宮古農民弾圧事件50年『騒乱罪』無罪判決

40年記念誌」参照

7．大山高春『知的ハングリーのままに』

「巻頭詩」―「子どもたちに　宿題を出す前に　自分に宿題を出そう／子どもたちに　宿題をして来ましたか　と聞く前に　自分は宿題を怠けていないか　自分に問おう／子どもたちに　勉強しなさいと言うよりも　自分に　勉強しなさい　と言い続けよう／教師の学び続けるその姿こそ　教師の　自己へのその厳しさこそ　教師のそこから得たその豊かさこそ　子どもたちの心を　底の方から揺り動かし　自ら　学ばないではいられない人間に育て上げてくれるのだ／私はそれを〝共育〟と呼びたい」。

「学力も学歴も乏しい」ことを「僻みの種にしないで、却ってこれを挺にして」、自らを「叱咤激励して来た」、それを「知的ハングリー精神」と呼び、「支えにして来た」という。それゆえに「ただがむしゃらに本を読」み、「そこから得たものを土台にして、自分なりに考えたりして来た」ので、「本にすること」などを考えたこともなかったのだが、「古稀」を迎え、「後に何一つ残るものがない」のは「やはり一抹の淋しさを禁じえない」と、「これまでの考えを百八十度転換して」、手元にある「原稿や印刷物のいくつかを整理し」たので、「全く自己満足のため」の「不肖の子ならぬ不肖の本である」（序）と記している。とは言うものの著者の四十二年にわたる教育者としての基本姿勢の行き着くところは、「巻頭詩」に示したとおりであろう。

第一部「講演録」、第二部「その時々に…」、第三部「研究報告」の三部構成であるが、目次を一瞥して、即著者の多才、多弁、能筆さが伝わってくるようだ。国語教師、指導主事、教頭、校長、教育事務所長と、職責にふさわしくその置かれた立場から、あらゆる場で、あらゆる事柄について語り、かつ書いてきている。それだけに幅広く数多く読み、研究を深めてきたことを示すものであろう。第一部の「講演録」では、自己学習能力と読書、読書に理屈はいらない、何のための学力向上か、道徳教育の基礎・基本、外野席からの提言―高校教師に望む、時代に即応するＰＴＡ創造、社会教育への提言、生涯学習活性化への提言、生涯学習社会における少年団体指導者の役割、以上九本であるが、なかには十五の柱立てからなるのもあり、いずれも本題に沿って縦横に語っている。「あとがき」によると著者はこのところ「体の傷は心をも蝕む」ほど「心身共に」不調のようである。それでいながら「もし生き永らえることが出来」れば、「もう一冊作ってみたい」とも記している。心から体調の回復を願うものである。Ａ五判、三一七頁、一七五〇円、みえばし印刷・出版部、八・一二刊。

（「宮古郷土史研究会会報」一二六号、二〇〇一・九・一三）

8．豊島貞夫『写真集　風雪の記録』

上野・野原出身で永年子弟の教育にたずさわる傍ら写真家としても広く知られている豊島貞夫氏が、このほど一九七二(昭和四十七)年以前の作品をまとめ、『写真集　風雪～復帰前・沖縄の教育』と題して出版した。

今日沖縄(日本)の教育は、「もの」の面では「世界でも極めて恵まれた環境にある」が、現在は「深く病み傷ついている」という。ひるがえって、戦後沖縄の教育は、「校舎設備や教材の皆無」のなか、児童生徒を集め、「悪の道へ走らないよう保護するとともに、学校の観念を児童に維持させることが重要な目的」で、ハングリーな状態が児童・生徒、教師、父母、地域、そして行政をも教育にひたむきにさせた」、「そのような時代の沖縄の教育の姿を写真を通して伝える」こと

で、「教育は何によって成り立つのかを考えるよすがになれば」との思いで刊行を思いたった（「はしがき」より）のだという。

まさに戦後沖縄の激動の時代ともいうべき一九六〇年代後半から「祖国復帰」へ向けての時期の写真一四一点を、十二の柱立てで編集している。へき地の教育、教公二法問題、風疹による聴覚障害児教育、学童検診、米軍人の犯罪による児童生徒の被害、毒ガス移送、過大規模校と学校の分離新設、学校行事（入学式、卒業式、水泳訓練）、こどもたち、坂田文部大臣の来沖、屋良知事の退任式・琉球政府の閉庁式、以上十二項だが、その一つひとつに必要適切な解説がついていて、その場面はもとより、世相、時代背景までわかる編集である。教育状況をとおして、戦争史を写しとっているともいえよう。

宮古関係では、来間島、池間小中、伊良部小、城辺小、多良間村、風疹による聴覚障害児教育など十三点入っている。「来間小中学校へ向かう文教局職員」と説明のある写真は一九七〇年十一月十三日の日付が入っており、来間島の東西二つある百数十段の石段のうち東の石段をのぼる先頭は故田場重雄先生であろうか。今では見ることもない自然の厳しい離島の一コマである。一四一点すべてに年月日が付されており、撮影～整理のすばらしさまで教えてくれる。

なお、豊島氏は宮古高校二期卒、一九九三年三月、県立開邦高等学校長で定年退職したあとは、沖縄女子短大常務理事等をつとめている。宮古では前平良市教育長・親泊宗正氏と一九八一～九七年、七回にわたって県立図書館宮古分館で「写真二人展」、一九九五年と九七年には那覇市民ギャラリーで、「海」、「雲」をテーマに二回個展を開いている。「沖展」写真の部準会員でもある。写真集はタテ一八・二、ヨコ二五・七センチ、二〇一頁、五〇〇部限定版、県・市町村教育委員会等に配布されている。二〇〇三・一二・一二・八刊。

（「宮古郷土史研究会会報」一四〇号、二〇〇四・一・八）

9．伊波寛『魂（タマス）抱き』

本書はさきの世界大戦から敗戦直後に至るころの、宮古の様々な習俗が、少年の目をとおして具体的に再現されている。おそらく明治・大正期生まれの人はもとより、昭和初期に幼少年期を過ごした誰もが体験、あるいは見聞した世界であろう。

現在と違って、テレビやラジオもなく、新聞にしてもタブロイド版ていどの小紙が一日おきか二日おきに発行され、しかもごく限られた家庭のみが購読していたころである。もとより航空便もなく、那覇や八重山の情報も週一回ていどの船便でしか入らない。水道やガスもなく、せいぜい平良の一部市街地に電灯と電話がわずかばかりみられた。まるで時間が止まっているのではないかと言えそうなそのころ、少年（女）たちは水汲みや草刈り、タキギ拾いなどの家事労働の合間には、季節ごとに互いに創意工夫して様々な遊具をつくり、集団遊びに興じていた。

このような少年たちにとって、夕食後のひととき、いろり端で、あるいは薄暗い石油ランプの下で、祖父母の語る「ユガタい」（夜・世語り）や二、三歳上の、せいぜい五、六歳年長のリーダー格の少年―ンマ大将らによって語りつがれてきた怪談めいた冒険談は半信半疑のなかにも、大人の社会への大切な道筋ともいえた。本書はまさにその反映である。

凧、祖父、蝉、按司、パナンツ、使者、妹、霊力、鷹、儀式、馬、神書、ミンブラ家（ヤー）、月見、タミス、石臼（いしうす）、星空、カプセル、病魔、胆汁、ユタ、龍宮神、御嶽、アカトカラ、以上二十四話、すべて著者の直接体験あるいは身近でおきた見聞談ゆえに、臨場感をもってせまっ

てくる。

ひと昔前の宮古では童名（ヤラビナー）は神名（カンヌナー）といい、庶民は生涯それ一つで通すのが常であった。戸籍制度や普通教育が施行されて、童名のほかに戸籍名（ナー）、学校名（ナー）でよばれる姓名を持つようになった。命名方法や由来、性別まで詳細に記されている（「儀式」）。

見聞は死の恐怖をともなう景観にまで及ぶ。三年生になったばかりの少年は近所のユヌス兄（アザ）に誘われて、生まれてはじめて海へ出る。「クマザの海」への道は急勾配の坂道で「パナンツ」という。「ススキ原を抜けると、湿地帯の細道」で、そこから「雑木林」を抜けると、「眩いばかりの純白の砂浜」である。「陽光が白砂に照り映え、網目の海面はゆらゆらきらめ」き、「渚からの眺めは見渡す限りの大海原」で、「ピシが、色鮮やかな内海と洋々と広がる外海へ分けている」（「使者」）といったぐあいに展開する。少年にとって先輩から教授される、すべては初めて体験する世界である。

もっとも景観のみごとさに心を奪われていたこのとき、沖の「ピシ」にひとり取り残され、塩が満ちてきて死の恐怖にさらされる。すると何処からともなく白髪の老人が現れて浜まで運ばれる。さらにふだんは通わぬクマザの海へ潮汲みに来た姉さんにみつけられ、命拾いする—という体験へつながっていく。

霊力（セジ）高い祖父の祈りで大伯父が蘇生（そせい）したり、祖父自身が予言どおりの月日に死去した（「神書」）など、読者は世にも不思議な神々の世界に、著者自身の霊力によってみちびかれていくようである。

濃厚な方言社会に生まれ育った著者は、共通語は「熟成不可能に思えてならなかった」が、「齢七十への坂に足を踏み入れようとするこのとき」「諸々の、言葉の呪縛（じゅばく）を解き放ち、これからの書く行為」のきっかけにしたく本書をまとめたという（配本の「あいさつ」状）。

とはいうものの、著者は三十余年高校の国語教師であり、傍ら石垣市史編集委員、同文化財保護審議委員として「古謡にみる両先島～狩俣祖神ニーリのパイヌシマを中心に」など、宮古・八重山に関わる多くの論考を発表してきている。次回はぜひそれらをまとめてほしいものである。

（「宮古毎日新聞」二〇〇四・四・二三）

10．砂川禎男『私の歩んだ人生航路』

一九七四（昭和四十九）年一月、平良第一小学校長在任中に請われて平良市教育委員会教育長に就任したものの、不本意な政争で退任を余儀なくされた砂川禎男氏が、このほど『私が歩んだ人生航路』を出版した。宮古での生いたちから、台湾—宮古—八重山—宮古…と、八十余年にわたるその折りおりの世相を織りまぜた、文字どおり波乱万丈の「人生航路」である。

序章「記録の重要性を痛感して」で、「文化の発展にはもろもろの記録が重要である」「人生も一代一代が文化の収受保持、そして継承発展の橋渡し役」であり、「自分の生涯を書き残すことは極めて大切なこと」であるが、「一般庶民大衆は、普通には子孫に引き継いで残せる財産が無に近いから、自分の生涯を記録して、何かの参考に供することがせめてもの一大事業である」との思いでまとめたことを明記している。財貨の代りの遺産—生涯の記録である。

教育長退任後は、塾の講師、家庭児童相談員などにも従事されたようだが、それらのすべての公的業務と離れた時点で、宣子夫人との結婚五十年の節目を記念して、一九九一（平成三）年四月に起筆し、九三年には上梓の予定であった、というから十余年前には脱稿していたのであろう。整理を一任された長男・祐一氏が、上梓してしまうと「父が人生はすんだと、すっかり生きる目標を無くしてしまうのではない

かと恐れたこと」、さらには同じ上梓するなら「母の短歌、書道を要所要所に配置することで、父母二人の記念誌にしたいと考えたこと」等による遅れである（「あとがき」）。

本文は四章構成で、各章ごとに三～十節からなり、さらに各節にはいくつかの小項目を設け、章末には宣子夫人の短歌と書を収録して読みやすく配慮されている。第一章「出生から小学生時代」あえて主とならず客となり争わざる者世に出る、一年生のはずだが、さまざまな生活体験について、第二章「波乱の前触れ～宮中時代」中央から地方へと波のように打ち寄せるのは何だろうか、日本の軍国化と侵略戦争、希望と戦時体制をはらむ中学生時代、第三章「苦あれば楽あり―台湾在住時代」目標達成へ向かって、大望の教員一歩踏み込、目標突入、天下晴れて、世の中すべて政治優先？、第四章「故里生活再開」台湾引き揚げ、生活の根拠を求めて、命名と運命論、廻れ右、前へ進め、離合集散、分離合併、決断と校長の権威、校風、教員への道―通学、独学、通信教育、教育のさらなる前進のために、野人生活の多事多難、以上四章二十一節である。

一九三五（昭和十）年三月、県立宮古中学を卒業（三期）して渡台、二ヵ月間の臨時教員講習を受けて、「教員心得」、教職についてから、さらに台北第二師範講習科一年を修了して「訓導」、在籍のまま「青年特別練成所勤務」で敗戦、戦後宮古に引揚げて国民学校勤務をへて、宮古民政府に入り、戦災ですべて灰尽に帰した全宮古の校舎等復興資材伐り出しのために西表島船浮に渡る、帰任後三度び教職へ。各項ごとに他に類をみないような特異な体験の連続である。

ここでは一つの例をあげておきたい。平良市教育長時代、一部ＰＴＡ役員の勇み足で始めた某中学校の運動場整地作業が規模の大きさゆえか挫折したが、議会は「財政難を理由」に追加予算を見送り、結果的に教委の継続工事は「予算なし工事」として市長らの「政治責任」が追求され、元々の原因は不問にしたまま、教育長らの「退任」へと発展した。当時マスコミで大きく取り上げられた「事件」である。この時期、地元紙のある記者が職場に「一週間に数回もきて、君の生殺与奪権はわが社にあると恐喝」された、と記している。

教育長在任中手がけた数々の事業のなかには、文化財保護や市史編さん、市民総合文化祭など周知の画期的な事業もみられるが、なぜか、一九七五年の条に「四月には、『郷土史研究会』を結成させ、初代会長に宮国定徳氏をお願いした」というくだりがある。これは記憶違いであろう。ともあれ本書は一教育者の家族ぐるみの自分史に止どまらず、地域史の一環としての必読にあたいしよう。Ａ五判、四二八頁、私家版、五・一五刊。

（「宮古郷土史研究会会報」一四九号、二〇〇五・七・一四）

11．菊池一郎『業績一覧・エッセイ』集

国立療養所宮古南静園で副園長、園長として二〇〇三年三月まで八年間勤め、退職後母校所在の熊本に引揚げられた菊池一郎医師がこのほど『業績一覧・エッセイ』を上梓された。原題は著者の座右の銘で、英語で明記されているが、その意は、著者も言うようにきわめて気宇壮大な「世界を相手に発言しよう」ということのようである。

実際に、英文の著書・論文はさておき、日本語で発表された著書・論文名をみた限りにおいて、まさに日々うまず座右の銘を実践しておられるであろうことを示唆しているようである。著（共）書二一点、論文九点、いずれも病理にかかわる専門分野ばかりである。

このほか、『日本医事新報』やハンセン病療養所の機関紙（誌）、沖縄の県紙、地元紙等におびただしい数のエッセイを寄稿している。そ

のほとんどは宮古在勤中の執筆ゆえか、宮古を題材にした作品が多い。専門の立場からは、宮古南静園の現状と問題点、ハンセン病制圧と沖縄での先進的政策、らい予防法を告発した医師、戦争とハンセン病、などがある。直接宮古にかかわるエッセイでは、愛すべきマクガン、島尻のマングローブ集落、ハジチ禁止令一〇〇年、宮古におけるハジチの特徴、イトトンボと宮古島、宮古島における漂流物など、時には身内から文章に主語がないと言われたりするということだが、どうしてどうしてエッセイは軽妙酒脱、たのしく読ませてくれる。B五判、横組み、二〇五頁、二〇〇六・三・一七刊。

（「宮古郷土史研究会会報」一五五号、二〇〇六・七・一三）

12．『平良新亮の足跡　亡羊の記』

一九七五年の宮古郷土史研究会の設立に参画し、八六～九五年は五期十年間会長も勤められた故平良新亮さんの一周忌を記念して、本年一月、ご遺族が『平良新亮の足跡～亡羊の記』を出版された。A四判・二五一頁からなる部厚な「遺稿集」である。大きく「自分史」「私の求道記」「看病日記」の三部構成になっている。当然のこととはいえ全巻をとおして、敬虔なクリスチャンとして誠実に生きた新亮さんのお人柄がそのままにじみでた、心あたたまる内容である。

巻頭の「自分史」は、少年時代、台湾時代、自立への道、わが魂の遍歴、の四章で止まっているが、「母の長期療養中の看病疲れからか、それとも運命なのか、執筆中途で倒れ」たための中断のようである（「発刊にあたって」長男平良博彦）。しかし各章ともにお人柄そのままの節が設けられていて、どのような内容か明示している。第一章「少年時代」は、体が小さいということ、食べるということ、子どもが死ぬということ、働くということ、ナツプィという祭祀のこと、ウヤーン（神女）のこと、なぜ農民は貧乏かということ（小禄玄明先生との出会い）、旅立ち計画の失敗（一）、旅立ち計画の失敗（二）、以上九節構成で、狩俣での生い立ちから、尋常高等小学校を卒えて台湾へ渡るまでの幼少期の様々な体験が、家族や狩俣の人びととの暮らしの中で浮き彫りにされている。とくに高等科生のころの小禄玄明先生との出会いは、その後の新亮さんの生き方―世界観の形成に大きく影響していることをうかがわせている。

第二章「台湾時代」は、二度の失敗ののち三度めの計画でようやく台湾渡航に成功したが、当初は適職をみつけることができず「ルンペン生活九十日」をへて、ようやく通信士養成所に入ることができた。しかし「通信士」となり前途に希望が見えてきたと思う間もなく、軍属として二年半軍隊（通信隊）に徴用され、除隊半年後さらに一年間正規の軍隊（衛生兵）に召集されて、米軍の爆撃で二か月の重傷と九死に一生を得ている。第三章は「自立への道」、日本の敗戦で、永住するはずだった台湾に別れを告げて、翌四六年四月、マツ夫人を伴って帰郷した。今も地域に根ざして運営されている狩俣自治会の購買店の設立に参画して初代専務理事となり、三年後、平良の西里通りで丸平商店―丸平せともの店への独立・自営の歩みを記している。第四章「わが魂の遍歴」は、前出の理由によるのであろうか、「キリスト教との出会い」だけで、自分史は中断している。幸いその後につづく「私の求道記」でうかがうことができる。求道記は四十年以前の、一九六四年三月十九日～十一月二十九日まで『週刊宮古』に二十回連載した同題の手記である。その中から、日々の生活の中で、パンのみでは生きない人間、信じられない話、奇跡は信じられるか、愛について、救いということ、神の愛、聖書の愛、罪と罰と恵みと、ことばの魔術性、非絶対化ということ等が収録されている。敬虔なクリスチャンとして、

日々の暮らしの中で自らの生き方について真摯に自問自答する、赤裸々な新亮さんの姿をかいま見せてくれる。

体調をくずされたマツ夫人は十余年、闘病生活をつづけておられたが、介護は専ら新亮さんが担当しておられたようだ。その間、誠実で責任感強く筆まめな方ゆえ、丹念に日誌もつけておられたようで、本書に収録された「看病日記」は闘病初期のころであろうか、一九九五年一月三十一日(旧元日)～十月八日までである。マツ夫人の病状はもとより、行きつけの開業医との関わり、琉大附属病院の入院・手術の経過、見舞い客、家族のこと、炊事、食事、時折には店番から研究会のことまで記録されている。ここでは研究会関連をいくつか紹介しておきたい。「郷土史研の例会は戦後五十年について語り合ったが出席者わずかに七名でさびしかった。羽地さん大いにしゃべる」(二・十六)、「宮古郷土史研究会から会報(九十一号)が届く。それを読むことで一日がつぶれた。この程度しか勉強することはできないありさま」(六・十二)、「図書館で砂川幸夫さんに会う。『宮古の戦争遺跡』という小冊子を作るという話。私が六百字余でのあいさつを記すようにと言われた」(七・六)、「郷土史研究会　七月定例会『槽棣の妻』～女性史の一環として、仲宗根將二氏はこのテーマを取り上げたとのことだが、男女間の問題なので、文学としては興味深いテーマだが、女性史という観点からとなると問題が複雑であるように思われる(以下略)」(七・二十)、「砂川幸夫さんあてにハガキを出す」(八・二十)、「宮古郷土史研究会　午後七月例会　岡本氏」(九・二十一)……など。平和や一坪反戦地主について記したのも散見するが、「剣を取る者は剣で亡びる。相手が攻めて来ない状況をつくり出すために努力すること、非武装に徹し、平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して、わが国の安全を保つ道を選ぶこと……」(八・二十七)などがある。

表題の「亡羊」とは、「逃げた羊をさがし求めるために、歩き出したが道が幾つにも分かれていて、どちらへ行けばいいのかわからないありさま」(本書より)の意で、新亮さんご自身が明記したのだという。新亮さんの「自分史」は未完のままということなのであろうか。本書公刊に尽力されたご遺族はじめ、狩俣自治会やキリスト教団等に心から敬意を表するものである。この後は、『平良市史』や『文化財要覧』『宮古研究』等に発表された数々の論考をどのようにまとめていくか、研究会に残された課題であろうか。改めて新亮さんご夫妻のご冥福を心から祈るものである。合掌。

（「宮古郷土史研究会会報」一六〇号、二〇〇七・五・一〇）

13．下地良男　写真集『沖縄　光と影』

本書の巻き表紙は明暗のくっきりした色彩に彩られた浜辺の光景である。宮古育ち、とりわけ下地の関係者ならばおそらく誰もが知っているであろう与那覇の前浜である。前浜を望むモクモウ林の樹間越しに撮影されている。逆光であろうか黒く高くそびえる数本のモクモウ、その下陰辺りに黄緑の毛せんを敷きつめたかのような草々(グンバイヒルガオ?)、まぶしいばかりに輝く白砂の前浜、海底の白砂の反映であろう、淡く緑がかった海面、その先の濃い藍色に染まった水平線に沿った左手は同色に染まった来間島…。一見暗い感じをさせながら、じっと見ていると、わずかに中央右から左へ斜に区切る砂浜、その手前の黄緑、先の淡い緑の明るさが、全体を引き締めて明るく、ひいては写し手のやさしさを感じさせる。説明文は「モクモウ林の中を海風が通り抜ける」とある。まさしく海風とともに写真家のこの景観に寄せるやさしく熱い思いが伝わってくるようだ。「あとがき」によると、著者の母上は来間島の出身のようである。大橋の開通しない

幼いころ、大人たちに連れられて来間島に渡ったときのことを「深い砂に足を取られながら暗い雑木林のトンネルを抜けると、突然、視界が開けて白い砂浜と真っ青な海が目に眩しく飛び込んできた。子供は我を忘れ、浜に向かってまっしぐらに走り出す」と記している。著者五歳のころの原風景である。記憶が鮮烈であるほどに、加齢とともに幼い日々への郷愁は、亡き母への甘酸っぱい思慕の念に重ねられて回想されていることであろう。

巻末の著者紹介によると、著者は一九三七年生まれの宮古出身である。一九七三年から本格的に写真に興味をおぼえ、これまでに「沖展」入選十九回、二科会写真部展入選四回の実績をもち、その間、一九八三年には、十年にして早くも初の写真集『沖縄・心根の風景』を出版している。さしずめ本写真集はその後の二十余年、島々をめぐり取りためた数多の作品の中から選りすぐった二冊めの写真集ということであろうか。

二十四×二十一センチの横組み判型、一一六頁に、一頁一点ずつ一〇八点、このうち宮古は十九点収めている。一点ごとに頁左上に表題ていどの短い説明、右下に場所がそれぞれ和英両文で明記されているだけで、他には何の解説もない。当然といえば当然だが、先入観を抱かさず、写真そのものから感じとってほしいとの思いがあるのであろう。作品は宮古から始まる。前浜四、来間大橋一、来間島二点とつづく。それぞれの表題は、一、浜へ下りる砂の小径、二、ひねもす寄せては返す波、三、真砂洗う波のざわめき、四、白砂と潅木の黒い影、五、前浜・来間水道の海の青、六、波の音・風の音、七、珊瑚の群落する岸辺、というぐあいである。これにつづいて平良・荷川取の「砂山」三枚―「上る砂道」「下る砂道」「穏やかな海」と、周知の砂山への上る道をのぼり切って、さらに下る道をへて、前面に広がる浜辺・海に至る、まさに先の前浜～来間島同様に順路に沿っての編集の巧みさをうかがわせている。おそらく未だ未踏の人にも臨場感を抱かせつつ明るくあざやかに写しとられた景観を楽しませてくれる、見事な手法といえよう。

このほか宮古関係では、化石・十万年前の時空を越えて（長間浜・来間島）、光輝ける海（来間島）、珊瑚礁洗う虹色の波（東平安名崎）、半農半漁の村・久松の朝の風景、朝の船揚場（久松）、今朝の水揚げ（〃）、光る海（狩俣）、崩れた断崖～東平安名崎、東平安名崎の津波石群などである。

八重山は石垣島の二点だが、沖縄本島は、首里、知念、玉城、座喜味、中城、勝連、今帰仁等の城や万座毛等の景勝地が様々な角度から写されている。それにくわえて周辺離島のほとんどすべて収録されている。伊平屋、伊是名、古宇利、屋我地、伊江、浜比嘉、宮城、久米、瀬長、阿嘉、渡嘉敷、座間味などすべて風景である。風景の中に人物の写っているのが数点みられるが、正面からのは一点もない。写真家の、沖縄の「光と影」へのこだわりからであろうか。今一つ、当初「目次」のないのがいささか気になっていたが、頁をめくっていくうちに少しも気にならなくなった。読者はどの頁から分け入っても何処へか迷い込むことはなさそうである。巻頭の岡本定勝詩集『記憶の種子』からの作品「静寂の島」も写真集の主題を暗示しているかのようである。題字は高田憲、共に著者の小学校から大学まで共に学んだ友人である。写真集『沖縄　光と影』―まずは手にとっていただきたい。

（「宮古郷土史研究会会報」一六二号、二〇〇七・九・一三）

14．笠原　政治「〈池間民族〉考」

表題を一瞥（いちべつ）して，驚く人もいるであろう。「池間民族」とは何もの

か、と。右傾化激しい世相ゆえ、新たな民族紛争かとおもわれかねないが、そんなキナ臭い話ではない。宮古の池間島系―池間・西原・佐良浜―の人びとと一文化人類学者の交流から生まれた「民族誌」である。

近世人頭税社会で池間島だけが他の集落（村）と違っていたはずはない。それが「池間民族」と誇り高く自称するのを当然視するまでに変貌を遂げたのは、人頭税廃止後、カツオ漁が始まってからだととらえている。

カツオ漁は一九〇六（明治三十九）年、鹿児島県人によって初めて導入されたが、それからわずか三年後には漁業組合が設立されて自主操業を開始、「かつおぶし」は大正・昭和戦前期を通して、宮古はおろか沖縄県を代表する特産品として発展している。

一九一九年、宮古・八重山にコレラが猛威を振るったとき、漁業組合を中心に一年近く海上を封鎖し、食糧はじめ生活必需品は直接那覇から仕入れ、一人の犠牲者も出していない。これは一例に過ぎない。

こうした他に類をみない郷土意識に根ざす自信のよりどころは、「聖なるナナムイ（ウパルズ御嶽）の神に抱かれ、海技に高い能力を持つ海洋民族、漁労民族として繁栄してきた」自信に加えて、民俗行事「ミャークヅツ」による人びととの堅い結びつきにあると指摘している。

著者は九一年以来六年間、池間島に通い、さらに十余年今も交流を続けるなかで、「池間民族」形成の時期についても、さまざまな事例を紹介しつつ具体的に論証している。

活字の上では、三七年に芽ばえ（「宮古郷土誌」）、五六年の教育委員選挙で顕在化し、八〇年代に入ってカツオ漁が斜陽化して、「漁村池間」は、「往年の溌剌（はつらつ）とした面影を失」っていく。他方、待望の「池間大橋」が具体化し、「未曾有の変化が到来」しようという時期に、三集落合同の親睦（しんぼく）行事「池間民族の集い」が始まり、広く知られるようになった。

郷土研究家の故前泊徳正や著者の先輩である野口武徳ら数多登場する人物群も興味をひくであろう。（「沖縄タイムス」二〇〇八・十一・二二）

15．真喜屋　浩　『私の回顧録　初一念一筋に』

宮古在住の唯一人の精神科医として知られる城辺・友利出身の真喜屋浩医師が、このほど『私の回顧録・初一念一筋に』を上梓された。お人柄にふさわしく表題通り幼少時から初一念、医師への波乱万丈の歩みが誠実にまとめられている。

六章三九項と付録二編による構成で、一人の精神科医の足跡に止どまらず、戦後宮古の公的医療機関はじめ医療全般について詳述した「医療史」である。

1、「苦節11年」医師への道

第一章「生立ち」では、倭寇にまつわる上比屋・元島・インギャー……、由緒ある多くの御嶽や遺跡、「偉大な豊見親」金志川兄弟の出た友利の、戦前・戦中・戦後に、砂川小・中学校から宮古高校への進学を重ね合わせて回想している。大正期、コレラの蔓延で、二五歳で早逝した祖父の「自分の子孫から医者を出してほしい」との遺言を若くして夫を失った祖母に、幼少から日々聞かされて成長していく。

第二章「学生時代」（一九五四～六八年）では、医者になるには「ヤマト」の学校へ、「本土の学生と同じ土俵で」という思いがつのり、高校二年修了で東京の高校へ転入学し、慶応義塾大学医学部に進む。しかし高校も大学も想像以上にレベルは高い。高校は三校めでようや

く編入試験に合格し、大学は予備校に通い三浪しての合格である。「志願率は二十三倍」という難関を突破して入ったが、途中から家庭の事情で仕送りが困難となる。バイトに追われて勉学が追いつかない。幾度となく退学の危機に見舞われる。このままでは「一生の夢が消える」、「必死の嘆願」で、「かろうじて退学は免れ」、「退路を絶つ姿勢で」頑張りぬく。こうして苦節十一年、一九六八年三月、めでたく卒業にこぎつけた。三十二歳である。

卒業式では医学部総代に選ばれ、塾長は「沖縄県出身　真喜屋　浩」と読み上げた。本土復帰四年前である。全国的な復帰（返還）運動が高揚している時期とはいえ、未だ「沖縄県」は回復していない。「数千人の学生、父兄、教授たちが居並ぶ」「大講堂を、津波のようなドヨメキが圧した」、真喜屋は「一瞬驚き、次の瞬間、一大ヒーローになったような喜びが胸にあふれ」た。他の県出身学生たちも思いは同様で、「ビックリした。体がゾクゾクした」と語っていたという。

2、精神障害者の「開放」へ

第三章「精神病院時代」（一九七〇～七七年）は、愈々医師としての出発である。沖縄に精神病床は一床もなかった、精神科医の第一歩、赴任、医療保険も機能しない、精神障害者の実態調査、結婚、の六項構成。大学を卒えて付属病院医局で研修中、「琉球政府」医務局長の訪問を受ける。「君たちは明日の医療のために大学に残って研修しているかも知れないが、沖縄では明日を待てない。今日の医療のために医者が必要なのだ」「国家試験さえ通っていればすぐ沖縄に帰って来てほしい」と要請される。

休みをとって一時帰省し、南風原町にある精和病院を見学して、医師をはじめ検査技師らの不足した窮状を目のあたりにし、帰郷を決意する。こうして一九七〇年七月から七七年六月まで精神科医療に従事し、診療と実態調査に当たっている。このときの実践をもとにして、のちに学位論文がうまれている。

第四章「宮古病院時代」（一九七七～九〇年）は、精神科を陽のあたる場所へ、ニーズに応えよ、記念誌発刊、支えてくれた母校・慶応、学位論文、宮古病院長に、宮古福祉保健所長に就任、の六項構成である。「鍵をかけて患者を束縛」する「閉鎖的」な病棟から、病状に即して「開放病棟」へぜん次改善し、作業療法を取り入れる、家族会の結成など、とかく暗いイメージを持たれがちな精神医療の質的向上に職員とともに尽力している。増床の過程では母校慶応大学からは三ヶ月交替で応援医師も来ている。

第五章「真喜屋精神神経科医院（一九九一～現在）は、開業を語る前に、生涯医師をめざし開業へ、開院・十周年を祝う、の四項。宮古病院の精神科医から院長四年をへて、宮古福祉保健所長になって二年め、公務員医師で定年を迎えるか、それとも……。幼少からの夢を実現させるために大学まで行かせてくれた「祖母や両親、その他多くの人々の願い」に応えて、「生涯を医師として働」く決意で、開業に踏みきっている。

近代化を急ぐこの国の精神障害者への施策は、「社会防衛のための治安対策に重点を置」く「精神病監護法」、ついで「精神病院法」で、「私宅監置」など筆舌に尽し難い悲惨な状況におかれた精神障害者のかつての実情にふれ、戦後は世界的な人権意識の高揚、医療関係者の努力によって、「精神障害者を疾病だけでなく障害者と認め、福祉の対象とする考え方へ動いていく」時期の開業であるとも記している。

3、私心のない社会との関わり

第六章「社会との関わり」は、地域と関わる、宮古島市長選に出馬、なりやまあやぐを掘り起こす、ＰＴＡ会長で奔走、知念かおり後援会

長、表彰・感謝状、母校・砂川中学に校旗寄贈、の七項。第七章「家族」は、私の家系図、真喜屋家・下地家、孫が次々と誕生、の三項。多忙ななかでよくここまでと思わせるほどに私心のない社会との関わりである。「二〇〇九年市長選挙戦総括」は、社会的には初の公表ではなかろうか。

付録として、①学位論文「沖縄の一農村における老人の精神疾患に関する疫学的研究」、②「宮古の精神医療小史」を収めている。学位論文は「〝限定された一地域在住老人に関する精神医学的疫学研究〟として、日本では唯一のものとして極めて高い評価を受けております」という（一ノ渡尚道防衛医科大学校精神科学教室・助教授）。A六判、三八二頁、新星出版

（「宮古郷土史研究会会報」一八九号、二〇一二・三・一〇）

16．「針路は宮古　虹を凱旋門にして」

旧平良市から五市町村合併後の宮古島市まで連続四期・十五年余市長として市政の民主的発展に尽力した伊志嶺亮医師は今年八十八歳、「米寿」を迎えます。これを記念して市長とともに地方自治行政を共有した元職員の有志が、「針路は宮古　虹を凱旋門にして」を刊行しました。

1．公私幅広い活動

伊志嶺市長は一九三三(昭和八)年一月一九日、父静雄、母マツの一男二女の長男として、教職にあった父の勤務地・多良間で出生しています。

一九五〇年三月、宮古高校を卒業(二期)して、国費学生として岡山大学医学部に入学し、一九五六年三月卒業後は津山市中央病院でインターンに従事しています。国家試験に合格して、一九五七年七月、ハンセン病療養所宮古南静園の医務課長として赴任し、翌五八年八月、二六歳で園長に就任しました。

その後は、一九五九年七月、宮古保健所長、一九六一年二月、伊良部診療所長、一九六三年一月、宮古病院長を歴任し、翌六四年五月、七年近い公務員医師に別れをつげて、平良・西里の現在地で伊志嶺医院を開業しています。耳鼻科と内科専門の街医者としての日常の診療の傍ら、宮古地区医師会に所属し、学校保険医なども引き受け、さらに医師会役員として、「医師会だより」や「医療史」の編さん委員長等も担当しています。

医療関係以外の活動分野も幅広く、芸術友の会や文化協会等の設立に参画し、会長として積極的に宮古の文化的うるおいのある地域づくりに貢献してきました。旧平良市では「市史」編さん委員も引き受け執筆もしています。

2．「市民の役に立つ所」

こうした医療はもとより、私心のない社会的、文化的活動が高く評価され、一九八九(平成六)年七月、推されて旧平良市長選挙に出馬し、三期めをめざす有力な現職市長を押さえて当選したものです。以来三期、十二年つとめて、五市町村合併で宮古島市が誕生したとき、引きつづき初代市長に当選しています。旧平良市の市長に初当選して就任したときの第一声は、文字どおり「市役所は市民の役に立つ所」でした。この庶民の哲学とも言える姿勢は、十五年の在職中一貫していたことは周知のとおりです。

「人と自然を育む文化都市」を基本理念にすえて、「若者がいきいきと働ける街づくりを進めたい。その為に第一次産業の振興は重要課題。農業で飯が食える場所にしたい。あまり人工的でない、やすらぎのある観光地が理想です」「開発の名のもとで貴重な自然を失うこと

は大きな損失であり、自然との調和のとれた『やさしい開発が至上課題』であると、市民に依拠して硬軟多様な施策に取りくんできたことが詳細に記録されています。

3．医療と、文化活動

伊志嶺市長は医師を志した動機について、高校生のころ「聖歌隊」として国仲寛一牧師に引率されて宮古南静園へ慰問に通っていたが、南静園には医者がいないのに心を痛め、将来は医者になって南静園で働きたいと考えるようになった、と記されています。大学を卒えて最初の勤務が南静園であったのは偶然ではなかったのです。医学生時代にはＮＨＫ岡山放送局の合唱団に参加していたとも伝えられています。

「沖縄県宮古に（音楽・演劇等の）最高の鑑賞団体あり」と、県内外で高い評価を得た文化活動を始めた動機については、「心から沖縄を愛しておられた」倉敷民芸館の外村吉之介館長との出会いを記しています。外村館長は戦前幾度となく民芸協会の柳宗悦氏らと来県しておられて、沖縄の「心優しさについて熱っぽく語られ多くの沖縄民謡のレコード」を聞かせてもらったことが、「遠因になったとも言える」と、記しています。

4．「亮市長を語る」

表題の「針路は宮古　虹を凱旋門にして」は伊志嶺市長の句であることが「編集後記」に記されています。内容は三部構成で、第一部「亮市長15年の歩み」では、旧平良市から新生宮古島市までの十五年の市政全般が多くの写真と、各種事業のポスターをそえて紹介されています。第二部「亮市長を語る」では、市長就任以前の活動のあらましから、在職中の状況を元職員有志が伝えています。第三部「市長職を離れて～最新二句集を発刊」と、市長就任以前からの句作に精進している姿も紹介されています。

第二部の「亮市長を語る」には七人の元「職員のメッセージ」が、「誇らしい気持ちで仕事をしました」と銘打ち、如何に密度濃い人間関係で、誠実に市政を執行していたかを明示しています。「市長随想」誕生の秘話、伊志嶺先生の米寿に寄せて、「世直し市長」の就任、市長のそばに三年、伊志嶺市長と八か月余…、海のまほろばと亮先生、市役所の思い出、以上七点。

最終頁に、「亮市長の米寿を祝って～元職員有志」二二名の氏名が五十音順に紹介されています。

本来ならば記念すべき「米寿」、ささやかでも然るべき所に宴席を設け、「針路は宮古　虹を凱旋門にして」の贈呈式も想定されていましたが、新型コロナウイルスの影響で控えざるを得ず、直接編集に当たった四人の有志だけで伊志嶺市長と昼食会で済ませています。「コロナ禍」が収まれば改めての想いもあるようですが…。

（「宮古郷土史研究会会報」二四一号、二〇二〇・一一・一六）

おわりに

一九九〇年代以降のごく一部にしか過ぎないであろうに、こうして一つにまとめてみると如何に多くの宮古出身者が表現活動にたずさわっているか、目を見張るばかりである。管見によれば明治・大正期から昭和一ケタ世代だけでも次のような方々がおられる。

歴史・民俗分野では、立津春方、富盛寛卓、慶世村恒任、川平朝建、下地かおる、金井喜久子、譜久村寛仁、宮国定徳、平良新亮、砂川明芳、佐渡山正吉…ら。那覇では、稲村賢敷、大井浩太郎、島尻勝太郎、大宜見猛…らの活動がみられる。

文芸分野はさらに多彩をきわめている。仲元銀太郎、平良定英(好児)、宮国泰誠、本村玄典(武史)、吉村玄得(松下仁)、池村恵祐(泉城)、本村隆俊、松原清吉(原龍次)、大山高春、伊志嶺亮、真栄城功、池間キヨ子、新城森彦…ら。那覇では、渡久山寛三、亀川正東、大山春明(虹石)、国仲寛力(穂水)、北村伸治、平良賀計(雅景)、平野長伴、新里恵二、川満信一(川瀬信)、岡本恵徳(池沢聡)、島尻スミ、新里スエ…ら。県外では下地恵常、垣花浩一(浩涛)、新里金福、大山盛長…ら、海外では平恒次がおられる。

昭和も二ケタとなると大方現役世代であり、枚挙に遑(いとま)ないほどの顔ぶれである。山之口貘賞(詩)受賞者だけでも十指近く、「沖縄タイムス」や「琉球新報」「ふくふく童話大賞」などの各種文学賞の受賞者も数多い。故砂川玄徳はじめ仲地清成、伊良波盛男、友利昭子、友利敏子、伊志嶺節子、川上哲也、市原千佳子、佐渡山政子、森田保、垣花恵子、下地ヒロユキ、宮国敏広、砂川哲雄、宮沢貞子、松原敏夫、新城兵一、久貝清次、与那覇幹夫、水納あきら（狩俣―玉城昭一）、岡田輝雄(世並岳生)…らはいずれも数多くの著書・論考を発表している。

これら宮古出身者の作品群を一堂にそろえられればゆうに「宮古文学館」が開設できそうである。これに出身県を問わず宮古を舞台にした作品群をそろえれば一層充実した「文学館」となろう。かつて旧宮古琉米文化会館の建物撤去にさいして、存続を提唱した友利昭子さんたちが構想した「文学館」はこのような多彩な状況を知っていての提唱であったろう。今後への重要な足がかりになったであろうに、今となっては一時的にもしろ実現しなかったのが惜しまれる。